

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

XI. 霊の賜物（続き）

コリント人への第一の手紙 12 章、14 章

ローマ人への手紙 12:4-8

エペソ人への手紙 4:8-14

この章のある部分は、霊の賜物はただ九つだけであると考えている人たちにとっては、驚くことであるかもしれない。コリント人への第一の手紙 12 章にあげているものに加えて、ほかにも賜物があるということを知るであろう。

しかし、それらを語る前に、私たちはパウロがコリント人への第一の手紙 12 章に述べている第三部の「力の賜物」を見てみよう。



まず、信仰が記されている。多分、それは、いやしの賜物、力あるわざの賜物を働かせるために必要とされるからである。

信仰は聖霊の賜物であろうか？

すべてのクリスチャンは信仰を持っている、ということは真実ではないのであろうか。私たちは信仰なくして、救われることは出来ない。信仰なくして、神を喜ばせることは出来ない。しかし、これは特定の人に特別な場合、聖霊によって特別に与えられるものである。神は環境に勝利する、との神よりの確信を彼らに与えられる。それは超自然的な聖霊の働きである。

聖書の中に見られるこの信仰の賜物の例をあげてみよう。●**ダニエル**はライオンの穴に入れられた時、この種の信仰を働かさなければならなかった（ヘブル 11:33）。●**アブラハム**がイサクの誕生を信じた時、この信仰を現わさなければならなかった。●**エリシヤ**もまた、やもめの油をふやす時、この信仰を働かさなければならなかった（列王下 4 章）。●**イエス**が「神を信ぜよ」と言った時、引用した事柄はこの種の信仰であることは疑いない（マルコ 11:22）。

力あるわざはもう一つの力に関する賜物である。

これは限界ある人間の頭脳にとっては理解するのに、余りにも大きすぎる。しかし、それは聖霊に満たされた信者たちの生活を通してなされる、聖霊の超自然的な働きである。

ウェブスターによる定義は、次の通りである。「奇跡（英語では「力あるわざ」と同語）とは自然の法則から逸脱し、あるいは、それらの法則に対する私たちの知識を超越した自然界における出来事、あるいは結果である。」

■聖書は奇跡の書である。事実、それ自体、最も偉大な奇跡である。■エジプトの災害は奇跡であった。紅海を分けたこと、マナが与えられたこと、レピテムにおいて岩から水が流れたことは、奇跡であった。■ヨシュアのために太陽が止まったこと、■エリシャによって斧（おの）が浮かび上がったこと、■ヒゼキヤのために日時計の影が退いたこと、これらはみな奇跡であった。

そしてもちろん、同じように新約聖書は奇跡で満ちている。■イエスが嵐を静めたこと、群衆を養ったこと、死人をよみがえらせたこと、■ペテロが獄屋から救出されたこと、■パウロのエペソでの特別な力あるわざ・・・なんとすばらしい神の超自然的な力の現われであろうか。

今日のサタンの働きの増大に対し、もし教会が地獄の努力に勝利を得ようとするれば、**信仰の増強が要求される**。私たちは今日、神がこの賜物を用いることの出来る敬虔な男女を見いだしてくださるよう期待する。

「いやしの賜物」は特別な種類である。

それは人間が賜物を所有して、いかなる病気の場合にも例外なく、いやすことが出来るというものではない。むしろ、神が教会の中に在し、病める者をいやす可能性をつくることである。

いやしの賜物の目的は、もちろん、病気の苦しみを解放するためである。しかし、それは**神に栄光を帰する**という、さらに高い目的を持っている。御言葉を確かなものとする**ことにより、神の全能の力に人々の注意を促すものである。**それはこのような方法によって、福音を受け入れることが出来るようにするために、人々の心を開くのである。これはほかの賜物と同じように、すべて神の支配と配慮のもとにある、ということをおかねばならない。

奉仕のための賜物

さて私たちは聖霊の賜物における、もう一つの分野にやってきた。それが霊の賜物に含まれるということを認めることに関しては、余りにも軽視されている。ローマ人への手紙

に述べられているリストの中に、預言を含んでいることにより、聖霊はコリント人への第一の手紙 12 章と、ローマ人への手紙の聖句とを結び合わせているように感じられる。

「奉仕」(ローマ 12:7)。という言葉は、一般的にクリスチャンの働きを言っている。

聖霊の油注ぎを受けて、必要な務めに応じることの出来る人々が、何と要求されていることであろうか。そこには、いかなる事をも主に対して行ない、また、聖霊の力によって行なうような、まったく献身が必要とされるのである。

「教え」とは、何と大切なことであろう (ローマ 12:7)。

これは信者を御言葉に確立させることを助けるところの、すばらしい働きである。「勧め」(ローマ 12:8) は愛する信者たちを導き、忠言、また警告するためのものである。聖霊に感動された施しは、神の働きにおける重要な部分である。「指導する者」はすべての指導者の立場にある人たちをさしている。それはただ、教役者だけではない。執事も、長老も、日曜学校、また青年会、あるいは地域教会における、その他の組織の指導者たちをもさしているのである。

聖霊は人間をも賜わる

コリント人への第一の手紙 12 章は聖霊が教会に与えられ、そして神の御旨に従って現わされるべき、これらの賜物について語っている。これらのものは、聖霊の賜物ではあるが、それらが聖霊の賜物のすべてではない。エペソ人への手紙 4 章 8 節から 14 節は、聖霊の働きによって与えられた、ほかの賜物について述べている。それらの賜物とは人間である。

新約における礼拝の要素は、自由と自発性である。

宗教はこの理想から離れれば離れるほど、講壇と聖職者中心になる。一方、私たちが新約の礼拝で知ることは、その群れの全員が寄与するものとして示されている。この事に関して、アーネスト・S・ウィリアムズは「**ペンテコステの理想とするものは、教会全体が聖霊に動かされて参与することである**」と言っている。

エペソ 4 章は聖霊によって、それぞれ異なった種類の働きを与えられた各人が、いかにキリストの体の徳を建てるためにつくすことが出来るかを語っている。

エペソ 4:11 は「ある人を使徒とし」と述べている。

この言葉のギリシャ語における正しい訳は「メッセンジャー」「遣わされた者」である。イエスが 12 人を彼の使徒として選んだのは事実である。イエスは彼らを訓練し、これらの人々は教会の土台を置く働きを行なうために遣わされた。彼らは特別な意味を持った使

徒であった。しかし、幾世紀もの間、ほかの人々は、これに似た働きをしてきた。ウィリアム・カーレイやアドニラム・ジャドソン、ハドソン・テラーのような人々は使徒的な働きをしてきた。神は今日なお、使徒的威厳と力を持つ人々を用いることができるのである。しかし、それは自称するだけのものであってはならない。

預言者とはだれのことであろうか。

特別な預言的働きを持つ人々を言うのである。私たちは、旧約の預言者は未来の出来事を語るものとして非常によく知られている、ということ覚えなければならない。

新約の場合は少し違っている。預言者の務めは、パウロが賜物を述べている中で誇っているのと同じ要素によって性格づけられる。コリント人への第一の手紙 14 章 3 節に「**預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰めるのである**」と言っている。

エペソ人への手紙 4 章 11 節の場合を除いては「伝道者」という言葉は、新約聖書にはただ 2 回記されているだけで、その一つはピリポの名称（使徒 21:8）として、他のものはパウロがテモテに勧めている言葉の中に見いだされる（第二テモテ 4:5）。文字通りの意味は「**良い知らせをもたらす者**」ということである。伝道者の働きの根本は魂に対する燃える愛と、失われた者をキリストに導こうとする切望であろう。

牧師もまた教会に対する賜物の一つで、最も大いなるものの一つであろう。

ギリシャ語の意味は「羊飼い」である。旧約における羊飼いが、その羊に対して持つ関係はすべて新約における牧師が、その会衆に対するものであろう。イエスは偉大な牧者であり、真の牧師は、自分がキリストの場において働いていることを感じるであろう。羊を愛する羊飼いは、彼の羊を導き、養い、守り、訓練するであろう。

エペソ人への手紙 4 章に記されている最後の賜物は、教師である。

ギリシャ語原本においては、パウロはここには牧師と教師の働きを一緒に記している。それはこれらの働きは多分、ひとりの人によってなされるべきことを示している。教えることは、たいくつで無味乾燥なものであってはならない。聖霊の油注ぎのもとに、生ける水の流れのようであればならない。まったく、教会はこの働きなくして進んでいくことは出来ない。それは伝道者の働きを補足するために必要なものである。

エペソ人への手紙 4 章に述べられている奉仕の賜物なくして、神が教会のために計画したことのすべてを成しとげることは出来ない。これらの働きの目的について、御言葉は「**聖徒の完成（成熟）のため、奉仕のわさのため、キリストの体の徳を高める（築きあげる）ためである**」と言っている。